



こまっ子

考えて、聴いて、また考えて

ある日の数学の授業です。「4本の棒を使って四角のマス目をつくります。これを連続して並べて行って、5個のマス目をつくる時、何本の棒が必要ですか（下図）。数式をつかって説明してください。」という課題に取り組んでいました。本数は図からして16本であることは明確です。課題はこれを数式で表して説明することです。ちょっと考えてみてください。



何本？

授業では、まず、生徒一人一人が考えてプリントに記入しました。その後、グループで意見交換をしたうえで、学級全体で意見発表をしました。出された式は、

- ① $1 + 3 \times 5 = 16$ ② $5 + 5 + 6 = 16$ ③ $4 + 3 \times 4 = 16$
④ $4 \times 5 - 4 = 16$ ⑤ $4 \times 3 + 2 \times 2 = 16$

などでした。発表された式が自分たちと違っていると、「どういうこと？」という表情で、興味深く友達の説明を聴いていました。考えて、聴いて、また考えて…。学校での学習には、覚えなければならないこともたくさんありますが、これからの社会では、考えることがとても大切だと言われています。ほかの人の意見も聴きながら、自分の意見を練っていく楽しみを味わえるといいですね。

ちなみに、この後、「では、マス目を20個つくるとしたら、何本必要ですか。5個の場合を参考にして式をつかって考えてみましょう。」という課題に挑みました（61本です）。式にできましたか？ できたら、相手にわかるように説明してみましょう！

総合体育大会

運動部活動の最高峰の大会です。誰もが全力を出し切りたい、と願って臨んでいます。昨年度は新型コロナの影響で中巨摩大会が行われず、変則的な県大会のみ実施されましたが、今年は何とか中巨摩大会から実施することができました。



毎年思うことですが、皆さんの取り組む様子を見て一番いいのは、大会前日です。試合前の緊張感と、これまでやってきた満足感と、それでももっとできたのではないかという不安感と、いろいろな感情が入り混じっている様子が伝わってくるからです。そんな皆さんの姿を見ていると、明日は全力が出せればいいなあ、といつも思います。

終わってみれば勝った部もあれば負けた部もありました。負けたところは、当然、悔しい表情が残りましたし、勝ち残った部には県大会へ向けての期待が残りました。しかし、勝った人にも負けた人にも、大会の思い出と、部活動の中でいろいろなものを積み上げて

きた自分自身とが残されていることは共通です。これからもたくさんの体験を積み重ねて、自分自身を育てていってください。 ※結果については、学年通信などをご覧ください。

学習の評価が変わります

今年度から新しい学習指導要領（文科省が定めた教育内容の基準）に基づいて中学校の教育が行われています。その中で、学習内容とともに評価についても変更点がありました。これまで4つの観点で評価していたものを、3つの観点で評価します（通信表も3つの観点になります）。

詳細については「学習を進めるにあたって」という冊子を学年別に配布しますので、こちらをご覧ください。

これまでの4観点

- 関心・意欲・態度
- 思考・判断・表現
- 技能
- 知識・理解



今年からの3観点

- 主体的に取り組む態度
- 思考・判断・表現
- 知識・技能

小中一貫教育のメリットとデメリット(5月号からの続き)

南アルプス市では、すべての小中学校で小中一貫教育を推進しています。といっても、学校が生まれ変わるというわけではありません。それぞれの小中学校がこれまでの教育を進めながらより強く連携することで、諸課題を解決していこうとするものです。白根巨摩中学区でも、小中一貫教育を推進していますので、保護者の皆様にもこのような機会をとらえて説明させていただいております。

本紙5月号では、「小中一貫教育とは」、「なぜ、小中一貫教育を推進するのか」について説明させていただきました。今回は、メリットとデメリットについて説明させていただきます。

まずはメリットから。次のようなメリットが考えられます。

- ① よりわかりやすい学習が展開される。
- ② 小中間のギャップが小さくなり、生徒指導上や学習上の課題が軽減される。
- ③ 9年間で児童生徒を育てるという教職員の意識が生まれる（中長期的な視点で教育が行われる）。

小学校の教員は中学校の、中学校の教員は小学校の学習内容や授業の方法を学び合いますので、小学校で学んだ内容をうまく活用して中学校の授業を組み立てたり、小学校と中学校の授業ルールが共通化されたりします。中学校の教員が小学校に行って授業を行う場合（教員免許の所持状況と人事配置により変わってきます）には、小学校でも専科教員による質の高い授業が行われます。また、児童と生徒の交流を活発にしますので、小学生が中学校に親近感を覚え、中学生は自己有用感を高めます。そして、教職員の意識が「9年間で児童生徒を見る」という意識に変わっていきます。

次にデメリットです。

- ① 教職員の交流、児童生徒の交流には、時間と手間がかかる。
- ② 教職員の人事配置によっては、毎年同様にはできないことがある。

新たなことをするために、どうしても時間と手間が必要で、教職員には負担になる部分が生じます。業務内容の見直しなどで、削減できる部分を同時につくっていく必要があると考えています。人事配置については、県や市に積極的に要望を出して、できるだけやりやすい状況をつくっていきたいと思います。 ※ 引き続き、7月号以降でも、小中一貫教育についての説明を掲載していきます。